
コミュニティを探して

(1)

藤 信子

先の連載は、個人が心理療法（カウンセリングも含む）などの心理的ケアへアプローチすることは、自分は精神的な病気ではないという抵抗も含め、誰もが簡単に思いつくことではないだろう、ということについて 10 回にわたって考えてみた。自分が心理的に悩んでいて（精神的な問題を抱えて）、それを誰かに相談するには、自分が問題を抱えていることを解決したいこととして、その方法を探すという行動が必要なのだと思う。ところが、自分の問題を客観的に把握するという習慣を、私たちは持っているとは言いがたい。むしろこの 20～30 年ほどの間、自分のことを考えるという習慣を身に着けるような、教育やしつけは私たちの周りから抜け落ちていって

るような気がする。誰かの作った価値観、良い大学や良い会社に入ることが良い人生につながると子どもたちを追い立て、そしてその背景はお金に関する価値のみを肥大化させていった体験だったのではないか。多様な価値を切捨ててひたすら走り続けることを自らにも子どもたちにも強いてきた結果は、自分について考える余裕はなくなるだろう。その中で傷ついた時、誰かに相談することを思いつくことは難しいだろう。

自分を見つめること、考えてみることはそのようにできる環境が必要なのだと思う。地域保健の問題で、公衆衛生の概念が無くなったということを、この頃聞く。私が 1998 年

保健所の難病の訪問カウンセラーを始めた時は、保健師は地域担当だった。それがしばらくして感染症、精神保健、母子、難病などの専門担当制になった。これは大阪府の場合だけれど、他の都道府県なども同じだと思う。私はそれまでの乏しい知識で、保健師が地域担当であることこそ、その地域・家庭との付き合いの中での、保健師が相談にのることのできる強みだと思っていた。赤ちゃんの相談にのりながら、家族の他の成員の問題なども念頭に置くこと、そういう環境を考えて予防を考える観点が大事なことだと思っていた。そこで保健師さんに聞くと、現場ではそう考えているが、政策を考える人達は違うようだとされた。その時は何故そんな不合理なことがあるのか、とわからないままだった。そしていつの間にか、保健所は統合され数が減っていった。この保健所から公衆衛生が消えたことは、予防医学などの観点の導入と関連しているようだとは、知人たちの話である。疾病予防は個人の努力の問題とされている。そこで疾病や障害は、個人の問題に限定されていく方向は、市場原理の考え方から誘導されているのではないかと思いついた。

私は公衆衛生を学んだわけではないので、その考え方は、若い頃に読んだクローニンの「城砦」で、主人公が下水道の問題に取り組んでいることくらいしか知らない。今回再度読もうと思って書店に行ったが、「城砦」は売

ってなかった。クローニンを読む人は今頃はまだもういないのかなと思った。疾病予防のために環境を整えるということが、公衆衛生の考え方なのだろうと思う。以前に比べ、医療の進歩を考えると、個人がより早く自分の状態を把握し、予防と早期の治療を考えるほうが、環境を整備するよりコストの面からは良いような感じなのかもしれない。しかし、環境は設備だけの問題ではない、人間関係も環境である。ここで取り上げたいのは、自分の状態を把握し、予防や治療に訪れることの無い人たちのことである。それは心理的な問題だけではなく、身体の問題でも言えることだろうと思う。

他者と自分の問題について考え理解する傾向を育ててこなかったのは、私たちが人とのような関係性を築いているのかという面からも見る必要があるだろう。広井(2006)は、現代の日本人の「自分の知らない(なじみのない)他者に対しては殆ど全く顧慮せず、またコミュニケーションをとらない」そしてこれは「自分の良く知っている他者(あるいは同じ“集団”に属するも者)に対してはむしろ異様なほど気を使ったり、あるいは“水入らず”と呼ばれるような強い親和性が支配することと表裏の関係にある」と指摘している。ウチに向かう関係が濃い場合、自分についての理解を伝えることが起こりえない可能性がある。そしてソトに対してはコミュニケーシ

ヨンをとらないとしたら、ウチを持つことが無くなると、その人はどうなるのだろう。独り誰にも理解されずにいることになる。病気にもかからず、経済的にも不自由せず、独りで暮らせる人ばかりならいいのかもしれない（本当にいいのかと言われるとわからない）。しかし、子育てに困ってアブユースに至る人、働けなくなってどこに相談することのできない人、自分の思いで孤立した人など関係性から切れている人は存在する。関係性の中でないと自分のことを振り返ることは難しいと思うけれど、どうしたら関係性は作れるのだろうか。

自分が帰属意識を持ち、支えあえるようなコミュニティを人はどのように作っているのだろうか。これからはばらくコミュニティを探してみようと思う。モデルを求めるというより、身近な場面や文献の中からその関係性の作り方を見つけていきたいと思っている。あえて文献の中と書いたのは、コミュニティの諸側面を分析する中で、私たちができることを、考えていく必要があると思っているからである。正直どのような展開になるかは、予想していない。予想しないで進みながら考えるのが、この連載に向いているのではないかと思っている。

—文献—

広井良典（2006）持続可能な福祉社会.ちくま新書